

本実践の指針および指導案

1. 実施科目

学校設定科目「OMURA STEAM LABO(以降、OSLと表記)」

(令和5年度より新設された「文理探究科」(第1学年/2クラス)で行われる1単位の科目)

2. 単元

7月28日	英語・海外 2	科学系トピックスを英語で読む2
8月24日	統計B ③④	仮説検定の実施 [平均値][度数] 統計的資料の読み方
8月31日	×	[S基礎へ]
9月14日	統計B ⑤⑥	因果関係と相関関係の違いに着目した資料の読み方 「対話型論証」を活用した、統計的資料に対する解釈の述べ方
10月12日	哲学入門 ①時間	自己紹介&アイスブレイク 「哲学」って何? 「ドーナツを穴だけ残して食べる方法」～大阪大学の事例をもとに～
10月19日	哲学入門 ②③時間	[2時間続き] 自己の生き方 「価値観は大切だと言うけれど」～ダイヤモンドランキングを用いて～
11月2日	哲学入門 ④⑤時間	[2時間続き] 自己と他者の生き方 ～公共の場をどうつくる?～ 研究授業
11月16日	哲学入門 ⑥時間	振り返り(全体まとめ)&ポートフォリオ記入
12月7日	STEAM1 講義	発電の仕組み・技術
12月14日	STEAM2 講義	世界各国のエネルギー種別の産出量・使用量
12月21日	STEAM3 発表準備	「これからの日本において、エネルギーの発電利用はどうあるべきか」 ★班ごとに討議の準備★

3. 学校設定科目の目的と目標

学校設定科目「OMURA STEAM LABO」の目的

社会課題と科学のつながりを意識した、社会課題を科学的な切り口で多角的に分析する力を育成する教科横断型探究カリキュラムを開発することで、科学的探究力と科学への興味関心双方の向上を図る。

「哲学」に関する単元(上表の10月12～11月16日)の目標

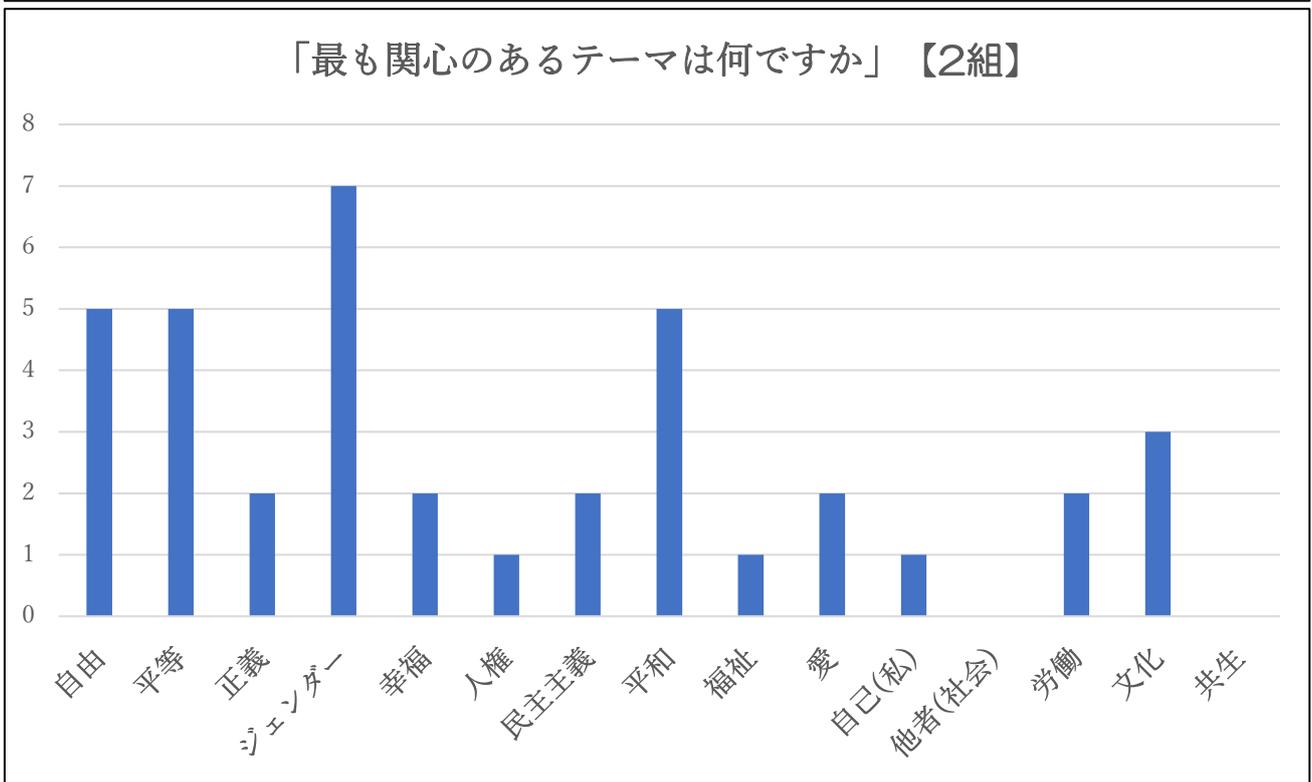
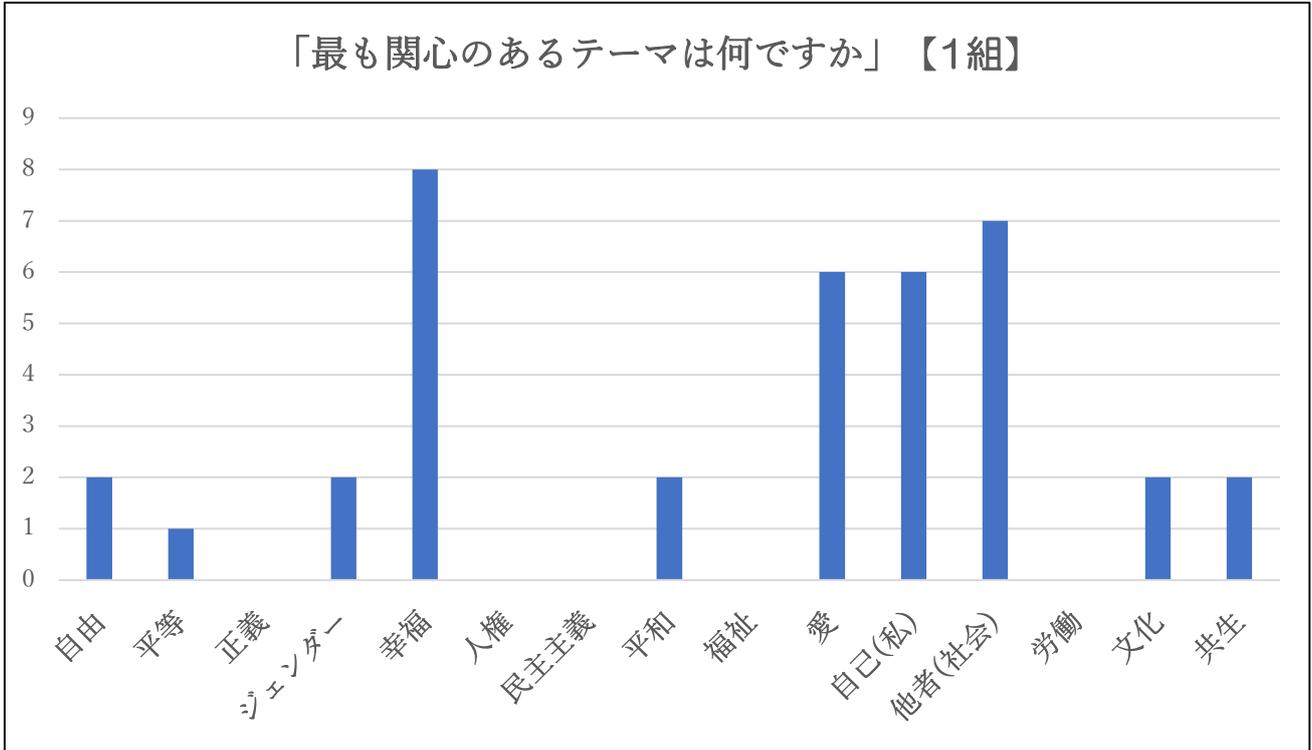
身近な社会的事象を多種多様な切り口で分析・理解し、社会的事象に対する他者の意見を受容した上で、自身の意見を論理的に説明できる「グローバル人材」を育成する。

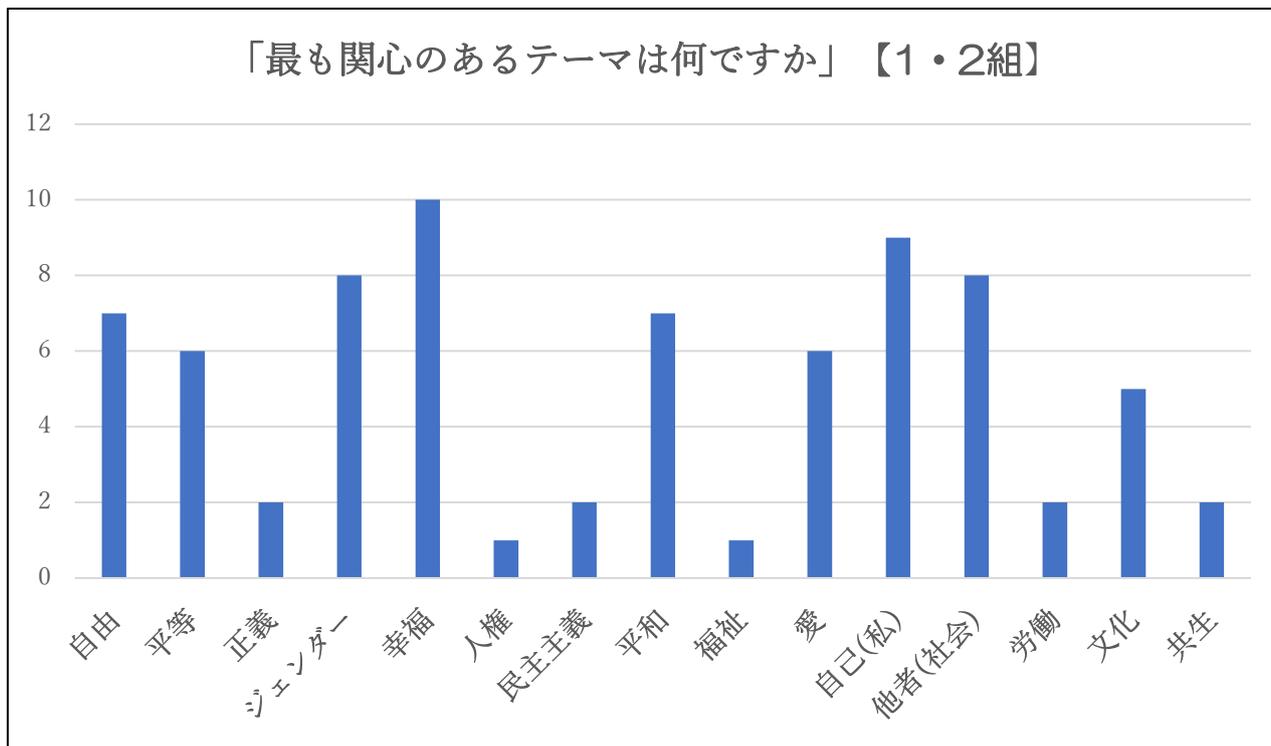
4. 研究授業に関する基本的概要

実施日 2023年11月2日(木) 3・4時間目(10:20～12:10) 休憩:11:10～11:20
使用教材 『新版 公共』(数研出版)を想定した教材 ※OSL内での実施のため、教科書は使用しない
該当する単元 第1章「公共的な空間をつくる私たち」
研究対象クラス 1年1組

5. 生徒観

文理探究科 1年1組(以降、対象クラス)40名は、大学進学を希望する生徒が多く、学習に対する意識が高い。また、他クラスと比較して、活発な生徒が多く、議論する際には積極的に関わろうとする姿勢が見られる。しかし、本教科(社会系教科)に対する意欲・関心には大きな差があり、一部の生徒のみで授業が展開される場面が多い。そのため、個別の声掛けやペア・グループでの話し合いなど相互に関わる活動が必要である。以下、対象クラスおよび同学科1年2組(以降、比較対象クラス)に行った事前アンケートの項目「最も関心のあるテーマは何ですか」という問いに対する、回答結果である。





アンケート結果から、対象クラスおよび比較対象クラス間に大きな差異を見て取れる。対象クラスにおいて最も関心が高いテーマは「幸福」であり、次いで「他者(社会)」、「自己」、「愛」の順であった。一方、比較対象クラスでは「ジェンダー」、次いで「自由」、「平等」、「平和」の順に関心が高い結果となった。これらの結果を踏まえ、本実践の対象クラスには「幸福」や「他者(社会)」について深く思考できる教材を提示したい。

なお、本実践を行うにあたって実施した事前アンケートでは、先述した質問項目(最も関心のあるテーマは何ですか)に加えて、「哲学に対するイメージ」「中学3年時に学習した公民の授業に対するイメージ(好き/嫌いを含む)」「哲学を学ぶ意義」「最近の気になるニュース」の質問に対する回答も収集した。これら項目に対する回答は、後述する「7. 本時の目標・評価の観点・展開」および「2. 単元」の「哲学入門⑥」において、生徒の意識の変容を明らかにする際に活用する。

6. 教材観

若者の「社会参加意欲の低さ」「社会変革に対する関心の低さ」等の課題を背景として、主権者教育の重要性がより高まっている。そこで、本実践では、主権者の育成という面において重要な役割を果たすと考えられる新科目「公共」を学ぶ前段階として、「公共」という空間・概念そのものについて考えていきたい。

本実践のキーワードとなる「公共(性)」には、1.国家に関連した公的なもの、2.すべての人々に関連する共通のもの、3.誰に対しても開かれているもの(齋藤純一『公共性』より)といった意味がある。これらの意味を踏まえて「公共」という空間・概念を考える場合、前提として各人の営みの結果により「公共」が成り立っていくということを理解する必要がある。しかし、多くの生徒は、様々な社会集団やコミュニティに属しているにもかかわらず、日頃から個人の行動が「公共」の形成につながるという意識の下に生活することが難しい現状にある。したがって、各人の営みの結果が「公共」の場を成立させるという認識

をもつことで、日常生活の中で主体的態度や主権者の育成につながることはもちろん、国家レベルの諸課題に向き合うきっかけになりうる。そこで本実践では、生徒がこれまでとは異なる視点から社会的事象を捉えることができ、且つ生徒がその社会的事象を「自分事として考えたい」と思える「切実性」のある教材を提示したい。

以上を踏まえた上で、教材として「社会的事象の意義や資料同士の関連性を捉えることができる資料」および「他者と共により良く生きる『公共』空間の形成のために、解決すべき課題に気づき、その解決方法を選択・判断できる資料」を提示する。これらの教材を用いて、生徒の育成したい能力は以下である。

①「自立した主体」として合意形成や社会に関わろうとする姿勢を基に、他者と議論する力

② 様々な視点から論理的に物事を捉えた上で、選択・判断する力

①における「議論」とは、相手の意見を受容(他者の意見に対して、どの程度まで同意できるか、あるいは二項対立にとらわれずに他者の意見に対して想いや考えをもつことができる状態)した上で、自身の意見をわかりやすく伝える過程を指す。異なる意見を主張し合うより、他者がなぜそのように考えたのかを理解することに重点を置く。その結果、生徒が異なる意見を認め合い、妥協点をさぐり合う活動の中で、自身の考えだけでなく相手の考えを大事にするようになる。これらの活動自体が「共に生きていくこと(共生)」や「公共」につながると考えられる。②においては、様々な視点から物事を捉える活動の中で、どのような視点から最も妥当な結論に導くのか、そのプロセスを含めて論理的に「判断する」ことで、「社会の仕組みや自身の価値観、考え方を再構築する力」の育成につなげていく狙いがある。

7. 本時の目標・評価の観点・展開

本時の目標

- ①資料 A・B・C を基に、「全体の利益や幸福」と「個人の自由や幸福」の関連性について考察し、自身の意見を身近な事例を用いて文字や言葉として表現することができる。(思考力、判断力、表現力等)
- ②資料 A・B・C と自身の生活の関連性に関心を持ち、自分なりに考えたことを他者に伝え、異なる他者の意見に耳を傾け、受け入れようとする。(学びに向かう力、人間性等)

評価規準			
諸資料を基に、身近な社会的事象を多種多様な切り口で分析・理解(社会的事象を、「両者・両面」の立場に着目して捉え、類似点や差異などを明確にし、事象同士を因果関係などで関連付ける)し、社会的事象に対する他者の意見を受容した上で、自身の意見を論理的に説明できる。			
評価基準			
	A. 十分満足できる	B. 概ね満足できる	C. 努力を要する
思考力 判断力 表現力	資料 A・B・C を基に、「全体の利益や幸福」と「個人の自由や幸福」の関連性について、自身の日常生活に見られる様々な事例を踏まえた上で十分に考察できる。そして、国家レベルの社会的事象(事例)についても身近な事例として考え、自身の意見を文字や言葉として他者にわかりやすく表現することができる。	資料 A・B・C を基に、「全体の利益や幸福」と「個人の自由や幸福」の関連性について考察し、自身の意見を身近な事例を用いて文字や言葉として表現することができる。 [資料 A について] ・「個人」の意見を契機として、公園廃止につながったことを理解できる。 [資料 B について] ・「個人」が「集団の利益や幸福」に苦しむ様子を理解できる。 [資料 C について] ・憲法から見た「個人」の扱いや各哲学者から捉える「個人と社会」の関係について理解できる。	資料 A・B・C を基に、「全体の利益や幸福」と「個人の自由や幸福」の関連性について考察するものの、自身の意見を身近な事例を用いて文字や言葉として表現することができない。 思考・判断・表現する様子が見られない生徒については、読み取りが容易な資料から取り組めるように個別に声を掛けたり、他者の意見を見たり聞いたりすることを促す。
学びに向かう力 人間性	資料 A・B・C と自身の生活の関連性に関心を持ち、自分なりに考えたことを積極的に他者に伝え、異なる他者の意見に注意深く耳を傾け、受け入れようとする。その後、自身の意見を振り返って自己と他者の意見を踏まえた見方・考え方のもとに、新たな意見を書いたり述べたりしようとする。	資料 A・B・C と自身の生活の関連性に関心を持ち、自分なりに考えたことを他者に伝え、異なる他者の意見に耳を傾け、受け入れようとする。 (ここでは、内容の深度を問わず他者の意見を聴き、他者の意見を尊重しようとする姿勢、また、自身の意見を自分なりに他者に伝えようとする姿勢が見られるなど、グループの意見決定が円滑に行われるように自ら進んで協力し合い、取り組もうとする行動や態度をいう。)	資料 A・B・C と自身の生活の関連性に関心を持たず、自分なりに考えたことを他者に伝えたり、異なる他者の意見に耳を傾けたりすることができない。 学びに向かおうとしない場合は、読み取りが容易な資料から取り組めるように個別に声を掛けたり、他者の意見を見たり聞いたりすることを促す。
評価方法			
・ワークシート、授業時の取り組み状況、自己評価(ワークシートの振り返り & 単元最後に行うアンケート)			

時間	学習活動	形態	教師の手立て
導入 10分	<ul style="list-style-type: none"> ・スクリーンにうつされた「18歳意識調査」の結果を見る。 ・質問全般に対して、「はい」と答えた日本の18歳の割合が低いことを知る。 ・発問①について考える。 ・「自分で国や社会を変えられると思う。」という質問に対して、「はい」と答えた日本の18歳の割合が非常に低いことを知る。 ・発問②について考える。 	個人 個人 ペア	<ul style="list-style-type: none"> ・スクリーンに「18歳意識調査」の結果をうつす。 ・「はい」と答えた日本の18歳の割合が、他国と比べて非常に少ないことを強調する。 発問① 最も低い割合となっている「質問項目」は何だろうか。 発問② 私たちは、これから社会とどのように関わっていくことが必要なのか。
展開① 15分 展開②	<ul style="list-style-type: none"> ・配布された資料 A(「子どもの声が騒がしい」1軒の苦情をきっかけに公園閉鎖へ)と資料 B(公園や保育園に愛着あったのに…女性が園児の声を「騒音」と感じるようになったわけ)を読む。 ・配布されたワークシート①を受け取る。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>【個人活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料の情報(資料 A および B の主張したいこと、相違点、関連性、気付き・気になる点等)を整理する。 ・文章内の重要だと思う箇所に下線を引く。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・発問③について考えたことを、ワークシート①の Q1 に記入する。 ・発問③に対する回答について、隣の人と意見交換する。 ・発問③について考えたことを発表する。 ・今日の MQ について知る。 	個人 個人 ペア	<ul style="list-style-type: none"> ・資料 A と資料 B を配布する。資料中の文章をよく読むように促す。 ・生徒が資料 A と資料 B に目を通した後、ワークシート①を配布する。 発問③ 資料 A ・資料 B を読み、あなたは市の決定(公園の廃止)について、「廃止して良かった」と考えるか、それとも「廃止するべきではなかった」と考えるか。(どちらに共感できるか) ・隣の人と意見交換する中で、「どのような点に着目して考えたのか」を話すように促す。 ・資料 A ・B の内容に触れ、一人の意見で公園が廃止されたことを強調した後、MQ を示す。

20分	<p>【本日のテーマ】(Main Question)</p> <p>生活する中で、『社会全体の利益や幸福』と『個人の自由や幸福』のどちらを重視すべきと考えますか。あなたの日常生活の中にある具体的な事例(場面)を挙げて自分の考えを述べてください。</p>	
20分	<ul style="list-style-type: none"> ・配布された資料C(「資料A・Bを考えるためのヒント」)を受け取る。MQに対する自身の考えを記入する。 ・グループをつくる。ワークシート①に記入した内容をもとに、付箋を用いてワークシート②に意見をまとめる。 ・グループとしての意見を決める。 	<p>個人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料Cを配布する。ワークシート①に、MQに対する自身の考えを記入させる。その際、資料A・B・Cを参考にするように伝える。 ・グループをつくらせる。自身の意見をグループで共有させる。その際に、付箋を用いて各人の意見をワークシート②にまとめる。
15分	<p>【グループ活動時】○具体的活動○</p> <p>①班員に対して、自身の意見とそのように考えた理由・根拠を伝える。</p> <p>②班員の意見を十分に聴き、そのように考えた理由・根拠を知る。</p> <p>③班員と結論が同じ場合、結論にたどり着くまでのプロセスの共通点や相違点を知る。</p> <p>④班員と意見交換することで、様々な視点から新たな考えを生み出す。</p> <p>⑤資料同士の共通点や関連性に気気付く。</p> <p>(思考・判断・表現) (学びに向かう力)</p>	<p>【グループ活動時】</p> <p>○授業者がファシリテートする際の留意点○</p> <p>①個人で考えを深めている場合は、必ずしも議論の活性化を促す必要はない。進捗状況を見て、意見交換を促す。</p> <p>②個人の考えが深まらないまま、議論が活性化している場合には、より具体的な場面を想定させて「どのような場面では社会全体の利益が優先されて、どのような場面においては個人の自由が尊重されているのか」など、議論の内容がより具体化するよう促す。</p> <p>③個人の考えが深まらない、且つ議論が活性化しない場合には、「集団として動く中で苦労したこと」や「個人と集団で動くことの違い」などを問いかけながら、生徒自身が考えを整理できるように促す。</p>
まとめ 20分	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の復習と本時の学習内容を振り返る。 ・ワークシート①の振り返りを記入する。その後、ワークシート①と②を提出する。 ・次回の授業の内容について知る。 	<p>個別</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会の一員である個人として生きていくことの難しさや「どうしようもない」ことに向き合っていくことの意義などについて触れる。 ・ワークシート①に振り返りを記入させる。その後、ワークシート②とともに回収する。 (思考・判断・表現) (学びに向かう力) ・次回の授業が単元の最後になることやその内容について説明する。

資料 A 「子どもの声が騒がしい」I 軒の苦情をきっかけに公園閉鎖へ

上記のテーマについて、2022.12.8(NHK オンライン)の記事をもとに資料を提示

資料 B 公園や保育園に愛着あったのに…女性が園児の声を「騒音」と感じるようになったわけ

上記のテーマについて、2022.12.21(東京新聞)の記事をもとに資料を提示

資料 C 【本日のテーマ】を考えるための材料

日本国憲法

(13条)すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする。

日本国憲法には、以下のように記されている。

(21条)…集会、結社及び言論、出版その他の一切の表現の自由は、これを保障する。

日本国憲法には、以下のように記されている。

(12条)…自由および権利は、国民の不断の(たえまない)努力によって、これを保持しなければならない。
…国民は、これを濫用してはならないのであって、常に公共の福祉のためにこれを利用する責任を負う。

個人の自由と社会の幸福 ～自由って何だ。幸せって何だ。～

民主的な社会とは、誰もが個人として尊重され、自由や幸福を追い求める権利が認められている社会である。しかし、個人の幸福はそれぞれ異なる。それらが衝突する場合もある。では、どうしたら良いのか。

この問題を解決するために、イギリスでは、功利主義とよばれる考え方が生まれた。

ベンサムという人物がいる。功利主義は、ベンサムによって唱えられた。

彼は、人間は幸福(快楽)という善を求め、不幸(苦痛)という悪を避ける者であるとした。そして、誰もが平等な社会では、できるだけ多くの個人の幸福が実現されるとともに、社会全体の幸福も最大のものにならないと考へた。つまり、社会全体の幸福が大きいと考えられる方が、善いことであるということになる。このようなベンサムの主張は、最大多数の最大幸福という言葉で広まった。

ミルという人物がいる。彼は、「ベンサムの功利主義は数や量ばかりに着目し、快楽や幸福の質を無視した自己中心的な考え方である」と批判した。幸福を求める個人の自由は、もちろん尊重されるべきであるが、他者の幸福にも配慮しなければならない。ミルは、個人の自由は無制限なものではなく、そこには他者危害の原則が適用されると説いた。これは、ある人物の行為が他者の生命や安全財産などに危害をおよぼすと考えられる場合、その人物に制限を加えても良いという原則である。

哲学者サルトルはこう述べた。『人間とは、自由な存在である。しかし、人間は自由であるがゆえに、自分の行動すべてについて、完全に責任を負わないといけな。人間には自由と責任が生じるのである。この自由と責任からは逃れられない。ここでいう責任とは単なる個人の責任ではなく、その自由による社会全体に対する責任を負っている。つまり、人間は自由の刑に処せられているのである。』…

哲学者ロールズはこう述べた。『誰もが自由に自分の利益や生き方を追い求めて良いが、才能や環境は人によって大きく異なっている。そのため、競争の結果、そこに不平等が生じてしまう。このような不平等が許されるのは、全員に公正な機会が保障されて、そして最も不幸せな人達の利益となる場合に限られる…』